
晴れ舞台

もみい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れ舞台

【ZPDF】

Z2097F

【作者名】

もみい

【あらすじ】

今日は幼稚園のお遊戯会。貴重な晴れ舞台の日。ピコピコする麻美と紀子。「ママ達仲良しち?」

「あら？ まだ全部覚えてないの？」 ちは完璧よ

「ただ覚えただけじゃない。もつと感情込めないと意味ないと思つわよ」

とある幼稚園。今日はお遊戯会で保護者も沢山来ている。小さな体育館のど真ん中で、人目を気にせず競り合つ一人。彩香の母、麻美と咲菜の母、紀子だ。オドオドしながら止める園長を無視して競り合つ母達の姿を、遠くで見ている綾香と咲菜。同じ妖精の役。色違いのフリルのワンピースを着て、小さい羽を背中にチョコンと付けている。

「ねえ、咲菜ちゃん。」の頃ママ達いつも喧嘩してるね

「彩香ちゃんと咲菜はこんなに仲良しなのにね」

二人は手を繋ぎ、ママの所に行こう、と走り出した。

「本番で足引っ張つたら承知しないからね」

「いっちは台詞よーまつたく・・・何で二人が同じ役なの？ 一人で充分じゃない！」

「ええそうね！ お宅がいなくとも充分だわ」

「何ですって？」

「ママ！」

彩香と咲菜がやつて來た。二人共目にいつぱい涙を溜めている。

「喧嘩しないでママ」

「そうだよ・・仲良くしてママ」

そんな娘達の姿を見た麻美と紀子は、ようやく我に返つた。

「ごめん紀子。ちょっと言ひ過ぎた・・」

「つづん・・私こそ・・」

園長が控えめに拍手をしながら、よかつたですよかつたです、と喜んでいる。

「ママ達仲良し？」

「ええ、仲良しよ」

「ほら、おでて繋いでるでしょ？」

しつかり繋いだ手を見た彩香と咲菜は、涙を拭いて一ヶコリ笑い走つて行つた。

「ちょっと紀子？手痛いんだけど」

「麻美が強く握るからじゃない」

「嫌だつたら離しなさいよ」

「そつちこそ離しなさいよ」

園長がまたオドオドし始めた。

『はーい、いち』組さんよく頑張りましたー』

彩香と咲菜の『いち』組の発表が終わつた。仲良く手を繋いで戻つて来た二人は、客席にチョコンと座つた。隣に居た園長が頭を撫でて褒める。

『じゃあ最後は、先生達とお母さん達の発表でーす』

劇が始まつた。お姫様と王子様の結婚式。森の動物達が一人を祝福して歌いだす。客席の子供達も一緒になつて歌い、体育館内は大盛り上がりだ。

舞台上で一番後ろに居た一本の木が前へ出て來た。木のデュエットが始まつた。左の木と右の木が違う歌詞を歌つた。デュエットが終わり、それぞれ左右の舞台袖に捌けようとした時、枝が絡まつて同時にこけた。枝はなかなか外れず、もがくうちに根っこも絡まつた。

見兼ねた先生達に担がれて舞台袖に捌けていく一本の木。

園長は彩香と咲菜にどうフォローしていいのか分からず、頭を抱えた。

「やつぱりママ達仲良しだね」

「うん、おでてもあんよも繋いでたもんね」

その言葉を聞いて安心した園長は、再び彩香と咲菜の頭を撫でた。

「木がね、ボクシングやってたよ」
トイレから帰つて来た男の子が大きい声で言つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2097f/>

晴れ舞台

2010年10月9日15時23分発行